

O1-003

病気療養児の詩や作文の特徴にみる教育的意義の可能性

吉岡 尚孝

関西福祉科学大学 教育学部 教育学科

【目的】

病気とともに生きる子どもの入院時の教育の在り方を考えるためには、子どもたちの状況、自分や他者、そして周囲の環境をどのようにみたり感じたりしているのかなど、その経験をつぶさに知ることが必要であるといえる。その嚆矢として、病気の子どもが書いた詩や作文の特徴を分析することを手がかりとしたい。そこで本発表は、院内学級に通う小学3年生から小学6年生のライフステージにおける子どもたちの詩や作文に基づいて、病気の子どもの詩や作文を分析する視点の浮き彫りにすることとする。

【方法】

『電池が切れるまで 子ども病院からのメッセージ』(2002; 角川書店) 所収の小学3年生から小学6年生の詩と作文を取りあげ、題材および内容と形式を観点として、どのような特徴をもつのか質的に明らかにすることとする。

【結果と考察】

今回対象とした小学3年生から小学6年生の詩や作文において扱われているテーマは、「命、自然、家族、手術、治療、病院、ごめんね、心、夢」などであった。題材および内容と形式から明らかになった視点は、子どもたちが何に触発されて書いているのか、何を思い出したり思い浮かべたりしているのか、時間や空間をどのように経験しているか、という3点であった。とりわけ、時間や空間にかかわる経験については重要な視座になると考えられる。小学校中学年から高学年における病気の子どもの時間感覚と空間感覚(以下、時空間概念)は発達的にも質的な転換期にあたるといわれる。自由に動くことができない、思い通りにならないなど身体に制限のかかる状況にある病気の子どもたちは、過去や未来を往来する時空間概念を生み出す機会が制限されることにより不安や焦燥感をさらに強める可能性があることが、先行研究からも十分に考えられる。しかし、本発表における子どもたちの詩や作文からは、それとは異なる位相がみられた。詩や作文を書くことそのものが、時空間概念を行き来する機会や経験となる可能性が示唆され、通常教室で詩や作文を書くこととはまた違った意味と意義があるのではないかと考えられる。今後、病気とともに生きる子どもの教育におけるこうした可能性をさらに明確にするためには、病気の子どもの時空間概念の往来を解明することが先決であると考えられる。

O1-004

肢体不自由児の通学状況に影響を及ぼす因子の検討

木原 健二^{1,2)}、大神 怜花³⁾、渡邊 雄介⁴⁾、
高田 哲⁵⁾、石川 朗²⁾

¹⁾神戸医療福祉センター ひだまり リハビリテーション科、²⁾神戸大学大学院 保健学研究科、³⁾西記念ポートアイランドリハビリテーション病院 リハビリテーション科、⁴⁾株式会社ALTHEA、⁵⁾神戸市総合療育センター

【目的】就学期の子どもにとって学校は重要な生活基盤である。しかし肢体不自由児では身体状態の不安定さ、医療機関への通院、医療的ケアを必要とする児の家族の付き添い負担等、種々の要因により通学が制限される状況が生じる。また新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行時にみられたように、感染症流行時には感染リスク回避のため通学を制限する状況も起こり得る。今回、COVID-19流行前後における調査結果を基に肢体不自由児の通学状況に影響を及ぼす因子を検討したので報告する。【方法】兵庫県神戸市内および岐阜県内の特別支援学校に在籍する肢体不自由児の主介護者を対象として、COVID-19流行前(2019年12月)および流行時(2021年9月)の児の登校状況について質問紙を用いた調査を行った。得られた結果からウィルコクソンの符号付き順位検定を用いてCOVID-19流行前と流行時の登校日数の差異を比較した。さらにCOVID-19流行前・流行時の双方について、週あたりの登校日数を目的変数とし、従属変数を児の年齢、医療的ケア(超重症児スコアに基づき4段階に分類)、運動機能(床上での起き上がり動作・介助を含む歩行の可否)、家族構成(きょうだい児の有無、祖父母同居の有無、ひとり親)、居住地域(神戸市・岐阜県)とした重回帰分析を行った。【結果】188件の回答が得られた(回収率60.3%)。COVID-19流行時には登校日数は有意に減少していた($p=0.003$)。登校状況に影響を及ぼす因子についての重回帰分析は欠損値がなかった148件を解析対象とした。COVID-19流行前は医療的ケアの有無($p=0.001$)および居住地域($p=0.004$)が登校日数に影響を及ぼす有意な因子となり、医療的ケアの重症度が高いほど登校日数が少なく、神戸市在住の児の方が登校日数が少ない傾向を示した。COVID-19流行時についても医療的ケアの有無($p<0.001$)および居住地域($p=0.03$)が有意な因子となり、流行前と同様の傾向を示した。児の年齢・運動機能および家族構成はCOVID-19流行前・流行時のいずれにおいても有意な因子とはならなかった。【考察】COVID-19流行時に肢体不自由児の登校日数は減少していたが、その一方で登校日数に影響を及ぼす因子は流行前と流行時で同様であった。今後、呼吸器感染症流行時に肢体不自由児が感染リスクを回避して安心して通学できるような環境を整えると同時に、医療的ケアの重症度や地域性を考慮した通学体制の支援を行うことが重要であると考えられる。